

おはなし散歩道
極楽風呂

八王子市 池田 美絵

和尚さんは入つてに供養を頼まれ、山のふもとまで出かけていった。ぼつんとあるその家は木戸も壊れかけ、見るからにわびしいたずまいだった。

「ここに来るのは初めてだと思ふが。しかし、そもそも家なんかあったかな……。」

和尚さんがいぶかしく思つてみると、「よく来てくださいまし」と、背後から女の声が聞こえた。振り返ると、姉さんかぶりに木綿の質素な上下を着た女が立っている。年は三十ぐらいたろうか。

「少し前につれあいが亡くなり、和尚さまにご供養をお願いしたいのです。貧しい暮らしで十分な御布施はできないのですが、

せめてお経のあとにお風呂に入つて下さい。」

女はこの家の女房で、頭を下げて和尚さんに頼む。春とはいえ肌寒い日であったから、和尚さんは、

「それは、有り難い」ところよく受けた。

木戸を開けると、狭い板の間に幼い二人の男の子が正座をして待っていた。七歳と五歳だといふ。

このような幼子を残して逝かなければならない父親の無念さ、これからの母子の暮らしを思い、和尚さんは涙をこぼした。

ねんごろな供養が終わると、和尚さんは女房に風呂へ促された。

和尚さま、ぬるいようでしたら速慮なくおっしゃってください。」

「ありがとうございます。」

まで湯につかり、程よい暖かさに、「極楽、極楽」とつぶやいた。

ところが、すぐに湯がぬるくなつてくる。「おーい。すこし熱くしておくれ。」

和尚さんが声を上げると、窓の外から、「はい」

と兄弟の声が聞こえた。兄弟が火の世話をしてくれている。やがてちようどよい湯加減になったが、しばらくするとまたぬるくなる。そんなやり取りを繰り返した。貧しい暮らしで薪も十分ではないのだから。和尚さんが不憚に思つてみると、

「燃やすものは、これしかないよ。どうしよう」と兄弟がひそひそと話す声が聞こえてきた。和尚さんは気を利かせたつもりで、

「それでよい」と応えた。

やがて湯が温まり、和尚さんは再び、「極楽、極楽」



とつぶやいた。和尚さんが寺に戻ると、小僧さんがびつくりして飛び出してきた。「どうされたのですか!」和尚さんは、木の葉を数枚つけただけの素っ裸で歩いてきたのだった。和尚さんは恥ずかずさで真っ赤になつたが、

「ははは」と高笑いをした。「さつきの母子は、タヌキかキツネが化けていたに違いない。私が脱いだ衣を薪がわりに燃やしたのだな。まあよい。供養させていただいたことが有り難い。」

(挿し絵・小出 茂)

高尾山小物語 12

長尾景虎による制札

絵・橋本豊治



右於武州小佛谷関越諸軍勢濫妨狼藉堅停止之若宥違反之輩者不嫌甲乙人可所罪科状如件

(高尾山葉王院文書 長尾景虎印判状)

永禄三年(一五六〇)、関東管領・上杉憲政を奉じて長尾景虎(後の上杉謙信)が、越軍(長尾勢)を率いて北条氏を討伐すべくに関東へ侵攻すると、

関東の反北条勢力が次々と越軍に合流し、十万人以上の大軍勢となった。

翌永禄四年の年明けには、景虎は北条氏の本拠地である小田原を包囲した。その時期に長尾方の軍勢が高尾山に到達した。

この時に景虎は葉王院周辺の小仏谷・棚田谷地域において、軍勢の乱暴狼藉を禁止させる印判状の制札を出した。同様に、長尾方であった岩槻城主太田資正の名前でも、高尾山麓周辺に対する判物の制札が出されている。

制札とは、禁止事項や法規を記した文書であり、時にはその内容が木札に記して掲示された。

一番だまし やすいのは自分 気を緩めない だらけけない

春の匂い

シャンソ歌手 友納あけみ

引っ越し先の桜上水で、新しい生活を始めています。新居は緑に囲まれた緑道沿いの高台のマンションです!南向きに開けたリビングの窓からは富士山が見えます!夜景もとっても綺麗!その風景を見て、この部屋で暮らしを決めました。引っ越してから少し経ちましたが、最近になって、やつと春の匂いがしてきました。空も、雲も、



春が訪れ早咲きの桜が満開に